

入場無料  
申込不要

みやぎ・しろいしフィルムコミッション × 白石市図書館

# 1日映画館「しろいし座」

会場▶情報センターアテネ  
定員▶各50人

◎みやぎ・しろいしフィルムコミッション ☎22-1321

http://www.city.shiroishi.miyagi.jp/section/shoukan/film/ ※フェイスブック・ツイッターも開設しています。

3月6日(木)

開演18:00(開場17:00)

特別上映会

## 「波伝谷に生きる人びと」

—第1部—

海の恵みを一身に受け 地域と深く関わりながら  
生きている人たちの物語

我妻監督の舞台あいさつあり!



全米No.1を獲得  
リュック・ベッソン 製作・脚本  
本格サスペンス・アクション



### STORY

宮城県南三陸町海沿いに位置する戸数約80軒の波伝谷部落。東日本大震災による津波で壊滅したこの小さな漁村に生きる人びとの、震災前の日常を追ったドキュメンタリー映画。物語は2008年の3月に始まり、漁業者たちの日々の仕事や地域の年中行事、そこでの多様な人間関係などが、ゆったりとした土地の空気とともに描き出されていく。過疎化が進みながらも豊かなくらしを育んできた波伝谷の人びとの時間と、そこに寄り添う作者自身の時間。二つの時間が重なりながら、物語はやがて2011年の3月11日へと向かっていく…。長年東日本沿岸部の人の営みを見続けてきた作者が、震災を経験した日本人に贈る入魂の一作。

監督/我妻和樹 製作/ピーストゥリー・プロダクツ(上映時間134分)  
2013年山形国際ドキュメンタリー映画祭で初公開

3月13日(木)

開演18:00(開場17:00)

第5回上映会

## 「96時間」



アメリカ政府のもとでCIAの秘密工作の仕事に携わってきたブライアン(リアム・ニーソン)は、仕事の原因で妻レノアと離婚し最愛の娘キムとも別々に暮らしている。17歳になった娘キムは、ブライアンが反対していた友達とのパリ旅行に出かけ、旅行中に誘拐事件にあってしまふ。誘拐される瞬間をキムとの電話越しに垣間見たブライアンは、CIA仕込みの洞察力と人脈で、犯人一味を突き止めるが、これまでの事例で、事件発生から96時間が過ぎると被害者は救出不可能というデータのもと、急遽パリへ飛ぶ。残された猶予は96時間。頼れるのは、己のスキルと娘への愛。ブライアンのすべてを賭けた戦いが始まる。

製作・脚本/リュック・ベッソン(レオン・トランスポーターなど)  
監督/ピエール・モレル(トランスポーター・恋愛適齢期など)  
出演 リアム・ニーソン(シンドラーのリスト・レミゼラブル・スターウォーズエピソード1など)  
2009年公開(上映時間93分)

©2010 DreamWorks Animation  
LLC. All Rights Reserved.

「集落」と「部落」の違いは、たとえ「ハウス」と「ホーム」の違いのようなもので、前者が単純に生活空間を指すのに対し、後者はそこでの人間関係や人生のせめぎ合いまでも含みます。波伝谷で「部落」という言葉が愛着をもって使われるのも、地域に残るさまざまな社会組織、近隣の親戚間、あるいは海の仕事を通しての人間関係など、日常の中で、良くも悪くもそれだけ人と人が深く関わり合いながら生きていくというところにその所以があると思います。

僕が大学を卒業するのと同時に、3年かけた波伝谷での民俗調査も終了し、それらの成果は民俗調査報告書として、漁村部のくらしを見つめた厚い内容の本にまとまりました。それでも自分の中では、まだまだ伝えなくてはならないものがあるというやりたりなきが残り残りました。波伝谷に生きる人びとにとって「部落」とは何なのか、「部落」というものから影響を受け、ときに葛藤しながら生きていく人びとの生き方を、その瞬間を生きてい。そして大学卒業を目前に控えた2008年の2月、僕の波伝谷でのドキュメンタリー映画制作がスタートしました。

震災前に東日本沿岸部に  
どんな人の営みがあったのか  
被災地のシンボルとして  
丁寧に描きたかった

3月6日、みやぎ・しろいしフィルムコミッション主催の1日映画館「しろいし座」で上映する134分の作品は、僕が2005年の3月に初めて波伝谷を訪れて以来、感じた約10年分の思いがすべて詰まっています。

実は2011年3月11日当日、僕は240時間に及んだ映像の編集も全く終わりが見えない状態でしたが、試写会の日取りを決めようと波伝谷に向かい、その途中で地震に遭いました。

地震に遭った時点では、波伝谷から遠く離れたので津波の心配はありませんでしたが、何か自分はその行かなければいけないような気がして車を飛ばし、結局辿り着けずそのまま、波伝谷の約1km手前で津波に遭いました。撮影機材を積んだ車を乗り捨てて近くの高台に逃げましたが、その時感じたのは、波伝谷の人たちがみんな流されてしまったのではないかとしたことでした。

自分が行って一体どうなるのか。こんな時に自分は撮りたくない。映画の最初の津波のシーンが音だけだったのも、カメラをバックに入れたまま回していたからです。でも、映像作家としては撮りに行かなければならない。いろいろな感情が複雑に入り乱れたまま、翌日瓦礫の中を徒歩で波伝谷に向かいました。

3月14日に波伝谷を出て以降、しばらくは戻れない日々が続きました。1日1日と被災地の状況がめまぐるしく変わっていく中で、それまで6年間通い続けた自分だけが時が止まっている状態。「自分が撮影した震災前の映像に果たして意味はあるのか、もう誰にも必要とされない時代を人はどう生きてきたのか。一つの地域社会の歩みとそこでの人の営みを、波伝谷という文字が表しているように、被災地のシンボルとして丁寧に描きたい」。それが僕がこの映画で表現したかったものです。僕自身はそれが小学生にも伝わるよう最大限柔らかくしたつもりなので、あとは観る人の感性に委ねます。

もし映画を観てくださった方や、この映画の存在を知った方の中から、自主上映会の開催など、ご協力をいただける方が現れてくれたら、こんなに嬉しいことはありません。一人でも多くの方に、この映画を届けられるよう、上映を希望される方は、ぜひメールでお問い合わせください。

◎ピーストゥリー・プロダクツ  
peacetree\_products@yahoo.co.jp

「ある時代を人はどう生きてきたのか。一つの地域社会の歩みとそこでの人の営みを、波伝谷という文字が表しているように、被災地のシンボルとして丁寧に描きたい」。それが僕がこの映画で表現したかったものです。僕自身はそれが小学生にも伝わるよう最大限柔らかくしたつもりなので、あとは観る人の感性に委ねます。

「ある時代を人はどう生きてきたのか。一つの地域社会の歩みとそこでの人の営みを、波伝谷という文字が表しているように、被災地のシンボルとして丁寧に描きたい」。それが僕がこの映画で表現したかったものです。僕自身はそれが小学生にも伝わるよう最大限柔らかくしたつもりなので、あとは観る人の感性に委ねます。

